

ミリアム・グラックスマン著、木本喜美子監訳

『「労働」の社会分析－時間・空間・ジェンダー』

(法政大学出版局、2014 年 301 頁)

高 田 実



研究者は、自らが用いる概念に縛られ、知らず知らずのうちに認識の枠組みを狭めてきた。自分が作り上げた操作概念の切れ味に酔ってしまい、時には歴史の実態を裁断する「プロクルステスの寝床」の過ちを犯すこともあった。また、理論の精緻化を急ぐあまり、具体的な事実を軽視する研究がある一方で、「大きな物語」への不信から理論一般に反発し、個別の世界を這い回る研究も物されてきた。ここで訳出された Miriam Glucksmann, *Cottons and Casuals: the Gendered Organisation of Labour in Time and Space* (Routledge, 2000) は、これらの問題点から解放され、「中間の過程」から、1930～60 年代のランカシャー綿業地帯における女性労働の実態とジェンダー関係を総体的に描く魅力的な本である。

中心概念は、「労働をめぐる全社会的組織化」(total social organisation of labour: 社会生活全体から見た「労働」編成のあり方)である。市場経済とリンクした有償労働と、家庭内や地域の相互扶助における無償労働の両者が、女性「労働」という包括的概念によって一括して捉えられ、両者の相互関係と連携が具体的に描かれている。

第 1 章は「働く」ことの意味を再検討し、「労働をめぐる全社会的組織化」という視点の有効性を示す。第 2 章は、調査方法に関して、調査する側の視線に含まれる問題性を指摘し、社会分析のあるべき方法(「中間の過程」の重要性)を提起する。第 3 章では、家庭と工場での労働の関連と布置関係を、女性のフルタイム労働者と臨時雇いの 2 グループ間の差異に注目しながら描き、第 4 章では世代間の相違を含んだ家族と労働の関係史を振り返る。第 5 章では時間が、第 6 章では空間が、女性の労働にいかなる影響を与えてきたのかを説明する。最終章では、理論と実証を合体させ、「労働をめぐる全社会的組織化」の全体像が、交差性と布置関係を重視した関係論として描かれる。

興味深いのは、「女性」のなかに引かれた境界線の多層性を、関係史として描いている点である。原題に示される「フルタイム綿業労働者(cottons)」と「臨時雇い労働者(casuals)」の区分と不平等だけでなく、副題にある「時間」、「空間」の磁場で、いかなるジェンダーの力学が作用していたのか、具体例を用いてわかりやすく説明する。時間(性)や空間(地域性)は決して抽象的で均質なものではなく、明確な質的な差異を含む社会的構成要素として描かれる。実態はあくまで関係論的に構成されるし、この関係性の描き方に著者一流の視点が表れている。オーラル・ヒストリーの手法が用いられ、1930 年代を回想する彼女たちの「語り」が主資料となるが、語られたことは絶対的真理ではないし、「語らないもの」にも意味がある。それを補完するために他の調査結果や社会学の理論が駆使される。

翻訳には苦勞の跡が忍ばれる。共訳の場合、訳語の統一、内容理解の合意づくりに多くの時間と精神的負担が求められるが、本書の場合、中心概念について訳語の統一が図られ、正確さと読みやすさの両方を備えた優れた訳出がなされている。

さて、この書物から評者は何を学んだか。三つの論点をあげておきたい。

第一に、オーラル・ヒストリーの手法を用いて、いかなる歴史社会的分析ができるか、また理論と実証はどのようにして組み合わせるか、叙述の過程に内在的に示されており、社会分析のあるべき姿を実体験できる。乏しい調査結果を、華々しい理論で飾り立てて描く著作が少なくない中で、「中間の過程」を重視し、理論と実証を双方向に何度も行き来しつつ分析を進める著者の姿には、イギリス経験主義の良心的な知的探究心と経験の深さを感じ取った。「私たちは、現実を無視せず、しかも体系的な分析や説明の探究もあきらめず、これらの論点〔ポストモダニズムやポスト構造主義が鋭く問うた論点〕を引き受け、議論を先に進める必要がある」(257頁)。「概念とデータ、抽象と具体をつなぐ、入り組んだやりとりを何度もくり返し、そのダイナミックな相互作用のなかで、理論は構築され精緻化されていく」(276頁)。これらの言葉を座右の銘としたい。これから本格的に研究の途に進みたいと思う人には、ぜひともこの点を読み取ってほしい。

第2に、「労働における全社会的組織化」(社会生活全体から見た「労働」編成のあり方)という視点の有効性である。私の言葉にすれば、「労働の複合体」となる。労働の中身に線引きをしてきたのは、研究者たちである。そこには、市場での有償労働に高い価値を置き、GDP主義(生産力と貨幣的富)に縛られて、「経済」「富」「豊かさ」を理解してきたわれわれの視野狭窄があった。本書の随所で示されるように、歴史の中に生きた人々は、生きるための必要に迫られた「労働」に線引きなどしていなかった。しかも、当たり前のこと、身近なことは、記録されていない。この文字化されなかったところから実像を浮かび上がらせるのに、オーラル・ヒストリーの手法が力を発揮する。おそらく世界各地の労働者世界では、本書が描くのと同一「労働の複合体」が存在していたであろう。どこでも、貨幣の量では表しきれない女性の社会的労働が、男を支え、国富を支えたのである。こうした「労働の複合体」の比較史的検討がまたれる。

最後に、歴史家として1点だけ問題提起をすれば、1930～60年代という時代性、そこにおける女性労働の連続性と断続性をどう理解するかについては、若干慎重な取り扱いが必要ではないだろうか。時代にはそれぞれの「個性」があるし、その特質が女性労働にどのように刻印されているのか、女性労働をより慎重に同時代の文脈のなかに位置づけることが必要だろう。そうしないと女性労働の変化の意味合い、歴史の達成が十分にはつかめないような気がする。その意味で、訳題にもこの点を反映させる一工夫があってもよかったのかもしれない。

低賃金の非正規雇用が蔓延し、労働の価値が毀損されている今日、女性の労働がこれまでどのような社会的価値を持ってきたのか、本書を通じて再認識すべきである。

(たかだ・みのる／甲南大学文学部教授)